新県立図書館についての広報手法

静岡文化芸術大学　文化政策学部　林左和子ゼミ
指導教員　：林　左和子
参加学生：赤渕花帆、勝田妃菜、小出一茉里、鈴木桃華、徳永朱玲
齋藤愛理、角替美里、中村晴乃、平松栞

１　要約

東静岡駅南口に建設が予定されている新静岡県立図書館の広報手法を検討した。 東西に広い静岡県において、静岡市に建設される新県立図書館が県内全体で十分に周知されているとはいえない。現在、情報を得る手段は世代によって差がある。その中で、利用者が多いテレビとSNSが広報媒体として効果があると考えた。しかしテレビで広報を行い、実際に見てもらうためには、話題性が必要である。一方SNSは、個人のつながり中で情報が広まっていく。

こういった状況を踏まえて、「新県立図書館にどのような空間があると良いか」というテーマで高校生と大学生によるワークショップの開催を考えた。高校生と大学生の企画の発表会であれば、テレビで取り上げられる可能性が高い。さらに参加した高校生、大学生たちがSNSで発信することで、周囲に広まっていく。

自分たちの企画が少しでも図書館に反映されれば、新しい図書館に親近感をもち、利用にもつながると考えた。

２　研究の目的

現在、静岡市谷田にある静岡県立中央図書館は1970年に開館したもので、施設の老朽化や狭隘化が問題となっていた。この問題を受けて、東静岡駅南口に移転する整備計画が作成された。令和5年7月には、基本設計も公開されている。本研究では、新しく整備される県立図書館の周知方法を考え、新図書館への期待感を高め、開館後の利用につなげることを目的としている。

３　研究の内容

新しく計画されている県立図書館は東静岡駅前であり交通の便は良い。とはいえ、東西に広い静岡県において、県東部に位置する伊豆や県西部地域からは遠い。新しく建てられる「県立」図書館であるので、全県民に利用してもらうことを考えたい。また広報の手段を考えるにあたって、一般にどういった広報媒体がよく使われているかも知る必要がある。こういったことを考えて、浜松市立中央図書館で利用者アンケートを実施、そのアンケート結果をもと効果的な広報方法を考えた。

４　研究の成果

(1) 当初の計画

公開されている新図書館の整備計画や基本設計をみた上で、実際に新県立図書館整備課の型から話をうかがう。さらに現在の県立中央図書館が抱えている問題や利用状況を知るため、県立中央図書館にでかける。

うかがった話を踏まえて、浜松市立中央図書館で行うアンケートの内容を考える。アンケートは11月に行い、その結果をもとにまとめた広報案を整備課の方にお示しして、さらに具体的なものとする。

(2) 実際の内容

Ｂ:一部修正

7月24日　静岡県庁で新図書館整備課の方から話をうかがう。

7月28日　静岡県立中央図書館で副館長山内様から話をうかがい、図書館を見学する。

10月に学生で相談してアンケートを作成し、新図書館整備課およびアンケートを実施させていただく浜松市立中央図書館の方に事前にいただいた。

11月6日13時～16時に浜松市立中央図書館入り口でアンケート調査を行った。幅広い年代の70名から回答をいただくことができた。11月後半にはアンケートの集計を終えることができた。当初の予定では、アンケート集計結果をもとに考えた広報案を新図書館整備課の方にお示しして、ご意見をいただき、さらに深めることを考えていた。しかし、アンケートの集計が終わった11月後半に、新県立図書館の建設工事入札不調が報じられた。報道によれば、新図書館の開館時期が遅れる可能性があることや不調の原因を明らかにして対応を考えるということであった。この状況では整備課の方に時間をとっていただくことは無理ではないかと考え、学生のみで検討していくことにした。

(3) 実績・成果と課題

アンケート結果から以下のことが明らかになった。

・県立図書館が移転することを知っていた人は12名と少ない。

・日常的に利用する情報媒体は、テレビが49名と最も多い。SND

・SNSを利用する人は、年代により多少差はあるが40名であった。

・日常的に利用するSNSの種類について尋ねたところ、YouTubeが幅曾広い年代で使われていることがわかった。

浜松市立中央図書館来館者対象の調査であるので、回答者は図書館にある程度は関心のある人たちである。しかしその人たちの間でも、新県立図書館についてはあまり知られておらず、積極的な広報が必要であると考えられる。

広報手段として、テレビが効果的であることがわかったが、テレビで取り上げてもらうためには話題性が必要である。またSNSも利用されているが、図書館や県が発信した情報を見てもらえるとは限らない。SNSの場合、興味をもった個人が親しい人に伝えていくといういわゆる「口コミ」の方が効果がある。「ファンベース」という考え方があるが、「ファン」をつくり、「ファン」を中心に情報が広まる方が広報として有効である。

この2つの観点から、高校生が参加するワークショップの開催を提案する。

静岡県の高校生に、チラシやポスター、さらに高校内の連絡媒体やSNSで募集を行い、東部・伊豆、中部、西部からそれぞれ8名程度の高校生に参加してもらう。地域の異なる高校生4名を1チームとし、1チームに一人大学生がファシリテーターとして参加する。初日と最終日は対面で行い、それ以外の日はオンラインで、「新県立図書館にどのような空間があると良いか」を話し合い、提案をまとめる。最終日は発表会も行い、優秀賞を決める。優秀賞に選ばれたチームに賞状を渡す他、全参加者にオリジナル図書カードをプレゼントする。

ワークショップ開催の広報効果としては以下の点が考えられる。

第一に、参加者募集そのものが高校生対する新県立図書館の広報となる。

第二に、高校生と大学生による新県立図書館に関する提案の発表会は話題性があり、テレビや新聞に取り上げてもらうことができる。

第三には、ワークショップの参加者が個人でSNSで情報を発信することが期待できる。

第四として、発表会で優秀賞となって提案やその他のアイディアから、少しでも実際の図書館に反映されれば、「高校生のアイディアを取り入れた」ということで話題性をもつ。

ワークショップを開催して終わるのではなく、ワークショップの参加者やその周辺の人たちを、新県立図書館に期待をもつ「ファン」とすることが重要である。

(4) 今後の改善点や対策

実際にワークショップを行うにあたっては、募集方法や運営方法などさらに検討しなければならない点がある。できれば高校の先生や高校生の意見も聞きながら検討していきたい。

５　課題提出者・地域への提言

新県立図書館を知ってもらうことが今回の研究の第一の目的であった。しかし浜松市立中央図書館でのアンケート調査では、現在の県立中央図書館を利用したことがない人が多いことも明らかになった。訪れるために時間もコストもかかることが大きな障壁となっていると考えられる。こういった障壁を取り除くためには、遠隔地からでも利用できる電子書籍やデジタルサービスに力を入れることが必要ではないか。ただ、同じアンケートで、静岡県立中央図書館がすでに取り組んでいる電子図書館サービスについても認識されていないことが明らかになっている。デジタル情報源の提供についても、広報が重要になってくると考えられる。

課題に取り組んでいる中で、新県立図書館建設事業の入札不調の報道が流れた。建築コストが上昇していることがその一つの理由ということで、多少の計画の変更はやむを得ないと思われる。ただ、新しい発想でデザインされた図書館建築に期待を寄せる反面、図書館の本来の良さはサービスにある。東西に広い静岡県の全県民が利用でき、これから静岡県を支える若い世代が利用したいと思うサービスの充実を期待したい。

６　課題提出者・地域からの評価

県立図書館として県全域の県民に隈無くサービスを届ける必要があるが、県政インターネットモニターアンケートの集計結果によると、県東部及び西部の県民から「遠方のため利用することはないと思う」「ＰＲが必要」などの声が多々あることから、新館で実施又は拡充する広域サービスに対する県民の認知度を高めることが重要である。

また昨今、大人の読書離れや活字離れが浮き彫りとなる中、図書館の利活用や読書活動の推進には、今後図書館利用の中心となる世代の興味関心を高めることが重要であり、新図書館は探究活動の拠点としての活用が期待されていることから、開館前から生徒・学生をターゲットにした新図書館の機能やサービス周知が必要になる。

今回林ゼミの研究では、課題となっている県西部の県民に対するアンケートの実施により、認知度や効果的な広報のための情報媒体の現状を明らかにしている。また、その結果を踏まえ、今後周知が必要となる生徒・学生に対する広報手法の提案を行っている。県立図書館の現状と課題に応じた研究内容となっている点をまず評価したい。

またテレビやＳＮＳなど、情報媒体の特徴・性質を活かした広報手法を検討し、ターゲットとなる若者の目線で具体的な企画の提案を行っていることから、今後の新図書館の広報への活用が期待できる。単発のイベントだけではなく、「新県立図書館に期待をもつ「ファン」とすることが重要」という提言は当課の願いとも重なり、ぜひ実現したいと感じた。今回の提案や生徒・学生のアイディアを活用し、よりよい新図書館のサービスを検討していきたい。